特集

本土復帰50年

あの時、あの場所

問い合わせ
生涯学習課
☎840-8163

今年は本土復帰から50年を迎える節目の年です。復帰前後で変化した糸満市の景色や人々の生活を見比べて、あなたは何を想いますか。

沖縄戦終結後、人々は故郷に戻り、元の生活を取り戻そうと奮起しました。しかし、アメリカ軍の統治下に置かれた沖縄では、本土に行くためにはパスポートが必要となり、通貨はドルが使用され、車は右側を走る……今とは異なる「アメリカ世（ユー）」の生活がありました。

そんな中、本土復帰を願う人々は、運動を起こします。祖国復帰要求大行進は全島で行われ、多くの人々が参加しました。海上では、本土との境界である27度線を挟んで海上集会が行われ、船上では復帰を願う本土と沖縄の人々が交流しました。本土復帰というただ一つの目標を胸に、人々は団結したのです。

多くの人々の努力が報われ、1972年5月15日午前0時、沖縄全島で本土復帰を知らせるサイレンが鳴り響き、ついに沖縄県は本土復帰を迎えました。27年に及ぶアメリカ世（ユー）を乗り越え、再びヤマト世（ユー）に戻った沖縄。様々な時代の変化を経て、今の沖縄が形作られました。

復帰50周年の今回は、復帰前の人々の暮らしの風景をお届けします。大きく変わったもの、変わらないもの、様々な糸満市の今昔を、写真で振り返ってみましょう。

嘉手志川

古くから重要な水源であった嘉手志川は、かつて地元の人々にとってなくてはならない生活の一部でした。洗濯台では、衣類のほか、カーペットなどの大きなものを洗ったり、子どものシャンプーもしたということです。

米須大綱引き

大勢の見物客で賑わう字米須の一大行事。ンマンイー（米須馬場。公民館前の道）沿いに建つ茅葺屋根から時代の変化が感じられます。

糸満ロータリー

終戦直後、瓦礫の山だった場所に広場ができ、後に円形交差点である糸満ロータリーとなりました。1971年には銀行や飲食店などが入居するビルが建ち、より賑やかに。復帰に伴い右側通行から左側通行に変更され、現在は新たにラウンドアバウト交差点として生まれ変わっています。

復帰前の写真はすべてモノクローム（白黒）でしたが、今回はより鮮明に見ていただくために、一部を除いて画像ソフトによる彩色を試みました。実際の色と異なっている可能性もありますが、ご了承ください。

名城ビーチ

当時は海水を使用したプールがありました。写真右側には、まるで子どもたちを見守るかのようにソニー坊やの像が立っています。名城ビーチには、プールのほかに小さな遊園地もあり、多くの人々に愛される遊び場でした。今年7月には、ホテルがオープンする予定です。

赤ちゃんコンクール

健康な赤ちゃんの育成や正しい育児知識の普及のために全国規模で行われていた「赤ちゃんコンクール」。糸満市でも1971年まで開催されていました。

サトウキビ畑

兼城地域から豊見城方面を望む一枚。畑の傍らに置かれた廃材も子どもたちの遊び場だったようです。写真右側には瀬長島とジジモーが見えます。

糸満海洋少年団本土研修

当時本土へ渡る際の交通手段は船が主流でした。出港時は色とりどりの紙テープが投げられ、賑やかな雰囲気の中で盛大な見送りが行われました。

第一製糖工場

製糖期にはサトウキビを積んだトラックが工場前に並び、周囲は独特の匂いに包まれました。工場は1993年に操業停止しましたが、その跡地はサンプラザいとまん商業施設となりました。右上は現在ケンタッキーフライドチキンがある兼城交差点。同じ角度から撮った現在の写真と比べると、目覚ましい発展が伺えます。